

アジアの友

The Asia-no Tomo

10-11

OCTOBER-NOVEMBER

2015

Special Interview

Supong Chayutshakij 氏

タイ日工業大学理事長・元TPA会長・元ABK-AOTSタイ同窓会会長



第14回 2015
ABK秋祭り

ABK秋祭り



第14回 ABK秋祭り開催

2015年10月24日(土)、毎年恒例となった「ABK秋祭り」を開催しました。今年は11か国の学生たちが料理屋台を出店。秋晴れの下訪れた大勢のお客様が各国の味とステージ上でのパフォーマンスを楽しみました。



アジアの友

2015年10・11月号 第517号

目次

	巻頭
2	<Special Interview> Supong Chayutsahakij 氏
18	私の意見私の体験 「異国の友達を作って視野を広げよう」 羅 淑慈 ~香港
21	インタビュー 「だから日本に留学しました！」 ムハムド アリ アリさん / イゼット キョミクさん ~トルコ
25	コラム 泰日工業大学 奮闘記 (第14回) 「中華系学生の勤勉さ」 池田 隆
28	おたより Visiting Tokyo after 50 years
30	知友会通信
32	MEMBERS

<表紙写真>

第14回 ABK 秋祭りのステージパフォーマンスより

Special Interview**Supong Chayutsahakij 氏**

タイ日工業大学理事長・元TPA会長・元ABK-AOTSタイ同窓会会長

『タイ日両国の友好関係の構築』『日本留学生の評価の向上』『タイ社会への貢献』を達成して

スポン氏は、日本留学時代アジア文化会館(ABK;1960年竣工。1957年設立した(財)アジア学生文化協会;ASCA 所有)に在館(1966~1968年)し、当時ABKに事務所を置く(財)海外技術者研修協会(AOTS;1959年設立。通産省所管。初代理事長は穂積五一、現HIDA)が、実施する海外からの技術研修生受入れに伴う研修コースで、穂積理事長(以下、穂積先生)の講義でタイ語通訳を務め穂積先生の考えに触れる機会を得ます。そしてまた、1966年に東京で開催された第1回ABK同窓会代表者会議に、タイ代表が参加できず、請われてタイ代表として参加することになり、そこで穂積先生の考えをより深く理解する機会を得る。スポン氏は、東京大学工学部修士課程(電気)卒業後、タイの日系企業に就職し、傍らABKタイ同窓会(後、ABK-AOTSタイ同窓会に改称)にもかかわり、当時通産省が推進する『日タイ協力事業』として(社)日タイ経済協力協会(JTECS;1972年設立。初代会長佐藤喜一郎、初代理事長穂積五一)を窓口とした“技術振興を通じたタイ国の発展に貢献することを目的として、産業人材の育成と日本からの技術移転を行うセンター”として、1973年に設立されるタイ国法人泰日経済技術振興協会(TPA)の設立発起委員の一人に加わります。そしてTPA設立後は、理事に選出されTPA事業を推進・発展させてきました。元日本留学生・AOTS研修生からなるABK同窓会を母胎にスタートさせたTPA事業は、関係者の情熱と努力により一步一步積み上げられ、タイの産業界ではつとにその名は知り渡るようになりました。そして、1998年には事業拡大に伴いTPA附属技術振興センター(TPI)を自力で建設し、更に2007年には、設立当初からの夢であった大学設立を実現し、泰日工業大学(TNI)を創設します。スポン氏は40年以上に亘りボランティアで志を共にする仲間とTPA事業を通じたタイの産業人材の育成に努めてきました。それによりタイ国の工業化と発展に貢献し、タイ日の友好関係の構築につくされてきました。その功績が認められ日本政府から2007年に旭日中綬章を授与されています。

この10月に日本で開催された2つの国際会議に参加された後、アジア文化会館に立ち寄られた折、お話を伺いました。

日本留学と 穂積先生との出会い

編集部 穂積先生との出会いから今日までの長きに亘るお話ですが、時間が限られていますので、コアな部分をお伺いできればと思っています。

スポン 振り返ってみると、タイ同窓会、TPA、TPI、泰日工業大学とずっと関係を持ってきましたね。僕はずっと理科系の勉強で、社会の勉強には浅く、もともとそういったアイデアは持っていませんでした。日本政府(文部省)の奨学生試験に受かって、日本に来る時は医学を志望していましたが、来日後、文部省に行って、工学に切り替

えました。それはタイの将来の工業化を考えてのことでもありました。

僕の高校の先生は、日本に行くのは止めた方がいいと言っていました。なぜかというと僕は成績が良かったので、留学するなら欧米の方が後々チャンスいっぱいあると。また医学ならタイも日本には絶対負けないから、タイで勉強すればいいじゃないかと。でも僕はとにかく日本に行きたかったので、それじゃあ医学ではなく工学の勉強に行くと言ったんです。

編集部 日本留学にあたって他にも何か問題はありましたか。



スポン 当時タイでは日本留学生が高く評価されてなかったこと、また反日運動も問題でした。

編集部 来日し日本語を学んだ後東大で学部を卒業、大学院の時に ABK に入寮したことが穂積先生との出会いですね。

スポン ABK に入寮してから穂積先生の AOTS の講義の通訳も時々させていただいたので、AOTS の活動に触れる機会もあり、先生が何を講義しているのかということも直に経験しました。講義の話題は「日本の政治と社会」でしたが、先生は日本の社会について、日本人の考え方について、日本

の製品について等々話され、わずか3時間のレクチャーでしたが、その中身は豊富で、そして、研修生に、日本でよく勉強し、十分研修を受け、国に帰って自国の発展のために貢献してくださいと。そして、日本に負けないように頑張りなさいと、先生はいつも最後にそういう言葉でしめるんです。僕は半年位の研修で本当にそこまで出来るのかなあと少し懐疑的に思っていました。

ところが彼らは半年の研修を修了し、自国で新しい工場を立ち上げるという難しいことをうまくやっていました。それを知って、見て、勉強は実践が大事ななと思ったわけです。そして先輩、後輩、皆で意見を交換してみると、やはり人材育成はより実践的で、現場向けのことをまず優先的に考えた方がよいのではとか、いろいろなアイデアが出てきました。

編集部 それはAOTSでの通訳経験を通して考えたことですか。

スポン AOTSの研修で来日した研修生は、研修先から戻ると毎晩ABKの食堂で食事をするのですが、その時いろんな意見交換をするんですね。それが耳に入ってきて。なるほど、僕が大学で7年間勉強し、帰国してから何ができるのかと考えた時、僕らも負けないように何かしないといけないんじゃないかと思ったんです。

実はその頃、博士課程はアメリカに留学しよう準備を進めていました。指導教官の山村先生に、留学の推薦書をお願いに行くと、先生は、「アメリカ行っても日本にいてもあまり変わらないから、博士号は



後にスポン夫人となるニラモンさんとお茶の水大学の卒業式で

東大でとったらどうですか。」と言われたんです。しかし日本にいても奨学金がもらえない。アメリカも奨学金はないけどTA(ティーチング・アシスタント)があるので、それでなんとかなると思っていました。しかし、東大卒業後、アメリカの大学が始まるまで半年ほど間時があり、その間大学の紹介で企業研修を受けることになり、工場実習を経験しているうちにタイでの仕事の話が舞い込み、アメリカ留学は先延ばしにすることに決め、とりあえず帰国し、就職することになりました。

また一方、心の中では人材育成が自国にどのような貢献ができるのか、ということ

も考えていました。ただ自分の力だけではどうにもできない。だから実践するにはチームを作らないといけないと。AOTSのような訓練学校のようなものがタイにもできればいいなあと思っていました。

編集部 穂積先生のレクチャーの影響と来日する研修生からの影響ですか。

スポン そうです。通常は穂積先生のレクチャーの通訳は英語なのですが、タイのグループは1クラス20～30人で、全部タイ人ですから英語で通訳しても仕方がない。タイ語に直接通訳した方がいいんじゃないかということで、ABKにいた僕が呼び出されたんですよ。僕が大学の用事で出られないときはいつ出られるか聞いてみなさいと言われたようで、最後はスポンさんでないとダメだということになっていたようです。僕は何度か先生の通訳をしていましたから、先生の話が頭に入っていて、通訳しながら同時に解説もしていたんです。だから僕自身も勉強になったわけです。

編集部 通訳を手伝ったのはいつ頃ですか。

スポン 僕が大学院の時代ですから2年間だけです。先生はタイ語がわからない。何で判断しているのかということ、研修生たちの顔です。目を、顔を見ればどこまで理解しているかだいたい理解できます。だからスポンさんの通訳が一番いいんだと言ったようです。

編集部 AOTSでの通訳それ自体がスポンさんも勉強になったということですね。

スポン ええ、大学の勉強とは全く違いますから。南北問題の話とか。そういう話は

工学部の人などはほとんど考えませんからね。ところが南北問題は自分たちにもすごく関係がある。なるほど先生の考えは深いなあと思いました。先生は僕だけでなく研修生たちにも日本で勉強して国に帰ったらがんばって、日本に負けないように発展して下さいと。南北問題が解決しないと世界が安定しない。こういう背景まで深く考え皆さんが頑張って国がレベルアップすれば経済も発展し、全世界がはやく平和になると。なるほど先生の言うことはものすごく意味が深いなあと思いました。でもまだ十分には理解してなかったと思います。

僕がまだ留学中の1966年(6月)にABK同窓会の第1回目の代表者会議が開催されました。タイの代表は不参加で、穂積先生か小木曾さん(ABK同窓会事務局長)からスポンさん、タイの代表として出てくださいと言われ、僕は会議に参加しました。最小限の発言しかしませんでした。そこで先生の考えがだいたい理解できました。その後、僕はアメリカに行かずタイに帰国して日系企業に入りました。

ABK同窓会と

AOTSバンコク事務所の開設

編集部 スポンさんが帰国した時点では、ABKタイ同窓会はどんな状況でしたか？

スポン タイ同窓会はありましたが、まだ正式に登録はされていなかったと思います。タヌース先生(東京大学)が初代の会長でした。2代目がビチャンさん(AOTS



現在のABK-AOTSタイ同窓会の事務所
(ITFビル13F)

研修生)。僕は帰国後日系企業に入り、しばらくして四国に研修に行きました。69年に工場の立ち上げ、そして元日本国費留学生会の活動もしてましたのでけっこう忙しく、一方、タイ同窓会はまだまだ活動はしてませんでした。

ABK同窓会代表者会議は、最初、3年に1度開催すると言っていますが、第2回目は万博開催に合わせ1970年(7月)に開催されました。第1回目はタイは参加しませんでしたので、今回はタイから4名の枠が与えられ招待を受けました。タイの同窓会から、僕も含め4名の代表が行くことになりましたが、直前で皆さん都合が悪くなり、僕も会社が拡張工事に入り忙しく、結局全員が出られなくなったと東京の同窓会事務局に連絡しました。すると、穂積先生から僕の家にかかってきて、大変驚きました。その当時の国際電話と云ったら、すごく大変なことです。先生は今回の会議は大事なので、タイから代表が出られないというのは大変残念なことだ。

せめて1人でもよいので参加してもらいたい。なんとか考えてくださいと。

そこでどうしようということになったのですが、他の人にいくら頼んでも無理だということで、僕は工場長に相談してみました。工場長は、それならあなたは行きなさいと言ってくれたんです。出発の2日前です。当時はビザをとるのも時間がかかりました。2日間ではとても時間が足りません。そこで、駐タイ日本大使館に行き、Visaを特別に早期発給してもらいました。おかげで、僕は代表者会議のオープニングセレモニーにギリギリ間に合いました。先生には、タイから一人どうしても出てもらいたいという思いがあったわけです。

帰国前、穂積先生は、僕を天ぷら屋に連れて行き、AOTSの富永(佳志)さんの話を紹介しました。AOTSがタイに初めての海外オフィス(駐在員事務所)をつくることになり、富永さんがその担当者になるということでした。それで、そうか今回の会議にタイ同窓会から誰か参加して欲しかったのは、この話があったからかだと納得しました。

僕は会議から帰国し、タイ同窓会のメンバーに集まってもらい、穂積先生からの話を伝えました。それから数か月後に富永さんはタイに赴任してきました(1970年10月)。その話は僕が東京で先生から話を聞くまでタイではだれも知りませんでした。そして先生は僕に、あなたたちが昔話していたことをいろいろ考えて、それも含めて富永君にはやってもらおうとだけ言われまし



穂積五一同窓会会長とタイ国 ABK 同窓会有志
(1971年5月、オリエンタルホテル中庭にて)

た。だから彼が行ってからいろいろ相談しながら具体化すると。

まだ反日運動は表面に出てない時です。学生の頃、僕は帰国したらこういうふうにやりたいとか、どういうふうにやればいいのかとか先生に話していました。通産省からタイのことについて先生はいろいろ相談を受けていた時期だと思います。

編集部 AOTS バンコク事務所の開設後は、タイ同窓会は事務所で定例会議を開いていたと聞いてますが？

スポン 当時は、タイ同窓会は集まる場所もなく、会長はいましたが、まだこれといった活動もしていませんでしたから、これを契機に新しい役員に変え、キャティポン先生（大阪大学）が会長になり、パッタマワディーさん（東京大学）、チラバンさん（AOTS 研修生）等が理事になり、活動も活発化しました。同窓会の会員の多くは研修生でした。AOTS の事務所はバンコクの

ピヤタム・コートに開設。キャティポン先生の紹介だったと思います。

TPA 設立への第一歩

編集部 AOTS バンコク事務所開設後、穂積先生は訪タイされていますね。最初の時は、タイ同窓会を中心に通産省の『日タイ協力事業』の調査・相談で行かれたのではないのでしょうか？

スポン 穂積先生は2回タイに来られているんです。（1971年及び73年）『日タイ協力事業』についてはどういう事業か中味ははっきりわかりませんが、先生と田井さん〔(財)アジア学生文化協会事務局長、後理事長〕、AOTSの高橋徹生さん（後専務理事）でバンコクに来ていろんな調査をし、各界の意見も聞いてます。そして、ドイツの援助でできたばかりの技術専門高校も見学に行きました。僕の先輩たち、

例えばタムチャイさん（東京大学）、タヌースさん、クラハンさん（東京大学）とも会って話をしています。タヌースさんはちょうど前の会社を辞めた時で、新しい事業の手伝いをお願いするには一番適任だと思っていたと思います。あの時は名前もまだ決まっていなかったし、何をやるのかもまだ見えていませんでした。ただ、技術者を育てる、人材育成をする、そういうプロジェクトをやりますと。

後に、田井さんに聞いた話ですが、先生は通産省の提案を了解したが、ただ、そのやり方については全面的に先生に任せてもらうことが条件だったそうです。その中にはタイの『日タイ協力事業』の会長の話も出ていました。数人の著名な日本人やタイ人が推薦されましたが、どうも穂積先生はあまり賛成しなかったようです。僕は先生の考え方はだいたいわかるので、そういう人では合わないと思いました。そういった偉い人たちの名前がポンポン出てくるのですが、新事業の顔としてはちょっと合わないのではないかと、やはりもっと日本とタイのことをよく理解している人じゃないとダメだと。そして最後の最後にソムマーイさん（タイ産業金融公社総裁、元タイ国立銀行副総裁、元大蔵大臣；慶応義塾大学）の名前が出てきたわけです。しかし穂積先生がいつまで経っても返事をくれないんです。だからもうダメだと思っていました。誰かまたいい人を考えないといけないと、富永さんが一生懸命調査をしていました。ただ通産省は間違いなくこのプロジェクト

は、できるだけ早く実行したい、発足したいと思っていたようです。

編集部 ソムマーイ先生のご推薦はスポンさんからでしたか。

スポン はい。ただ、僕は彼がどういう人なのか実はよく知りませんでした。僕の友人のルーンチャイさん（慶応義塾大学、後タイ国立銀行総裁）がよく上司のソムマーイさんの話をしていました。彼とは学生時代に知り合い、考えも近く親しくしていました。彼は穂積先生のことは直接知りませんでした。僕を通じて知っていました。彼からソムマーイさんの話を聞いていて、ソムマーイという先輩はいいなあと思ってたわけです。しかし、ソムマーイさんは忙しくて時間がない。おそらく無理だろうとは思いつつ会って話しをしてみました。ただ僕の下手な説明ではソムマーイさんは納得してくれませんでした。

編集部 当時スポンさんはまだ20代でしたね。

スポン 28歳ですよ。でもソムマーイさんから見たらまだ子どもみたいなものですよ。君の言うことはわかるけど、まあまあと。穂積先生の所に行って話を伺ってきてくださいと提案しても、忙しいからと。本当に忙しいのは間違いなかったのですが、…。その後、穂積先生が了解というか、興味を持ったと聞き、僕は大変嬉しかったです。しかし、ソムマーイさんからまだよい返事がもらえず心配していました。そうこうしているうちに、ソムマーイさんがアメリカに行くので、途中日本で穂積先生に会っ

てみると。そして、先生とソムマーイさんが新宿の京王プラザで会うことになりました。そこがTPAの出発点です。それがなかったらどうなったか。ソムマーイさんじゃなくてもTPAはできたと思いますが、どういうTPAになったかわからなかったですね。

編集部 ソムマーイさんはどんな方だったのですか？

スポン 考え方が明瞭でかつものすごく意思堅固な方です。

後でわかったことですが、ソ

ムマーイさんは穂積先生と会ってお断りするつもりだったとのこと。ところが穂積先生がソムマーイさんの条件を全部呑んで、OKをだして承したので逃げられずにやることになったと。それは非常にラッキーなことでした。

編集部 感動的な話ですね。ようやく、設立に向けスタートラインに立ち準備が始まるわけですね。そして、1973年1月にTPAは設立されますね。

スポン 設立時の設立発起委員はソムマーイさん、キャティボンさん、タヌースさん、パッタマワディーさんと僕です。元日本留学生、AOTS研修生を会員とするABKタイ同窓会が中心となりTPAは設立しました。設立したばかりの時点でソムマーイさんが大蔵副大臣に任命されたため、初代会長はソムマーイさんに代わりワーリーさん（タイ産業金融公社総裁、東京商科大；



TPA 発会式。左からソムマーイ TPA 名誉顧問、穂積五一理事長、ワーリー TPA 会長（1973年5月、ワー・チューリヤン財団ビル5F）

後の一橋大学）が就任しました。準備段階から問題はたくさんありました。留学生出身の方はみなさん優秀ですが、意思が強い人が多く、なかなか妥協しませんから、意見がまとまらず夜中までよく討論しました。ただ皆さん自分の考えを通す熱心さはすごかったです。

日本流チームワークが光った TPA の運営

編集部 事業が始まり、TPA が安定的になったのはいつ頃からですか。

スポン 安定期などないですよ。いろんな問題が常に、最初から今までずっとあったわけですが、それをクリアしながらここまでやってきました。

編集部 日本留学生の優秀な人、個性の強い人たちの頭脳（理事）集団が、よくここまで続いてきましたね。



TPA 会館（スクムヴィット通りソイ29）

は日本留学生をタイ社会は高く評価してくれています。日本留学生のOBが、こういう団体を作って社会に貢献するのは素晴らしいと。欧米の留学から戻ってきた人たちも負けないようにいろいろなことを勉強して帰ってきてますが、でもこういう団体

スポン こういう集団からはかえっているいろいろなアイデアがでてくるので、それも成功の秘訣になってるんですよ。全部誰か1人が決めてやるとかえって問題が起こるかも知れません。だから意見が合わないのはいいんですよ。ただ、最終的に会議でこう決まったらこのようにやると。それが一番いいやり方なんです。討論の時はいくら時間がかかってもいいわけです。夜遅くまでよく議論しました。でもみんなが納得するために、無駄な時間も使いましたが、みんなが意見をだして、がんばりましたね。しかしスポンさんは夜が強いから、みんなは眠くなったから負けたと。そんな話もありますけどね。(笑)

編集部 そう、TPAでは夜遅くまで皆さんががんばっていると日本側に伝わってきましたよ。

スポン そうじゃないんです。がんばっているんじゃなくて意見が合わなかったんですよ。(笑)

TPAでの僕たちの頑張りもあり、最近

体を作ることは出来ない。なぜ日本帰りの留学生ができたのか。それはあなたがたが日本からチームワークをよく勉強して持ち帰ったからだと言ってます。

ただ、私たちはチームワークの研修を受けたわけじゃなく、自然に学んだんです。日本の大学では、勉強会とか研究会の時なども個人的にやるんじゃなくて、団体に勉強する。僕は山村研究室でしたが、先生から教えてもらうことは3～4割位です。ほとんどが先輩からです。曾根先生とか、助手の人がよく面倒を見てくれました。

学生が何をやっているかだいたいわかっていて、こちらが質問しなくても「スポンさん、こういうふうにやってみたらいいよ。」とか、横から僕が何をやっているか見ていて、聞かなくても教えてもらえる。グループの結束が強いのだと思います。それがチームワークの元でしょう。

編集部 TPAの運営システムで、理事のもとに専門委員会（小委員会）作って各プロジェクトを進めて行くやり方はとても合

理的で効果的だったように思いますが。

スポン 日本にいる時、大学で輪講がありました。この輪講システムを覚えて、これいいなあ。同期をまとめると10人位いるから、こういう勉強会だったらお互いの勉強になるんですよ。勉強会で話を聞けば、何を勉強してるかがわかり、それは何に 응용ができるのか、そしてタイでどう応用できるのか等、いろいろアイデアが出てくるんです。こういう軽い勉強会はいいなあと考えていました。だからこれがTPAに 응용できればと思いました。

設立時、セミナー事業を希望する理事がいなかったのが、僕がやりますと手を挙げました。ただ僕一人じゃできないから、一緒に考える専門の委員を4人ほど探してグループをつくり（小委員会）、相談しながらやったほうがいいと提案して実施することになりました。結果として、これでセミナー事業もうまくゆき、またよいネットワークができました。

小委員会ではTPAの理事のもとそれぞれの専門分野の人が数人委員として月一度くらい集まり話しあう。今タイでは何を教えたらいいかとか、日本にこういう面白い技術があるのでタイに取り入れたらどうかとか、専門家の人たちもやはりよく意見をだし、議論して決め、事業化することができました。それもTPAの成功の秘訣だったと思っています。

また、小委員会はお互いの刺激もあり専門の勉強にもなるし、協会全体の勉強にもなる。そしてTPAの精神も同時に理解す

る場にもなっていました。

こうして生まれた専門家のネットワークはTPAの最大の強みです。TPA講師のネットワークは、外部にどういふ分野のどういふ専門家がどこにいてと、今ではTPAの300人のスタッフが、全て把握しています。

編集部 これはTPAのエキスパートプールですね。長年やってきましたので、膨大な数の講師を抱えているのでしょうか。やはりTPAのすごいところですね。

スポン そうです。今は90%の人が外部から来ています。内部は10%にならないでしょう。だから大学を作った時点では、TPAと大学のエキスパートの相互交流ができるようにしたいと考えましたが、これはまだ課題が残されています。

核となった工業計測技術訓練事業

編集部 さて、ここで一つ具体的なTPA事業についてお話を伺いたいと思いますが、TPAでスポンさんが立ち上げた工業計測技術訓練事業についてお聞かせください。

スポン この事業は僕が自分で提案し担当して始めた事業です。1977年に開始しました。計測機器の制御・測定に関する研修コースです。今日まで続いている事業ですが、今は、コンピュータ制御も入っていますね。当時は皆さんあまり理解してくれませんでした。プラユーンさん（大阪大学）は、現在タイ王国国家計量標準機関（NIMT）の所長ですが、その時には、「スポン先輩な

んでこんなこと教えますか」って言ってましたからね。(笑) 計測機器のトレーサビリティですね。何のためにやるのかわからないと。今では彼はエキスパートですよ。この分野ではタイで一番偉い。けれどもその時点ではわかっていなかった。(笑)

僕の専門は制御工学ですから工業計測の重要性を認識できたのは会社に入ってからなんです。日系企業には校正(キャリブレーション) 基準値というのがあり、計測機器の測定には必須でした。当時、タイにそういう校正基準値はなかったため、会社の測定機器の校正をするのに毎年日本に送っていました。TPA も初めの時は測定機器を毎年日本に送って校正していました。だから僕のセミナーでは、レクチャーだけじゃなくて工業計測技術の測定実習を取り入れ訓練を始めたんです。TPA でも実習を伴うセミナーは他にありませんでした。講義する人が誰もいなかったの、僕がやることになりました。

実は、僕は、自分の会社から横河電機に派遣され、計測機器の測定技術の研修を受けてきてました。当時、僕は会社で電気計装課長だったんです。ですから、TPA の実習用設備も自分で設計図を引いて、タイで造りました。

編集部 その後、TPA は校正センターを開設しましたが、今ではTPA の稼ぎ頭になっていますね。

スポン 現在は計測機器の校正の需要が大幅に増えて事業規模も拡大しています。1997年に建てたTPIに校正センターを移

し設備も増設しています。各企業がISOを取得するためには校正は必須です。また、ISO登録した後も企業は工場内の計測機器のトレーサビリティを一定期間内に毎年に行わなければなりませんからずいぶん需要が増えています。現在、TPAはタイ国最大の計測機器の校正サービスセンターです。

転換期と新たなスタート

編集部 素晴らしいですね。TPAは、この事業一つをとってもそうですが、『日タイ協力事業』としてこれまで長期間に亘り地道に、しかもタイ社会にしっかりと根を下ろし成長してきましたが、振り返ってみていかがでしょうか。

スポン やはりTPAの一番大きな転換点は、6～7年前に、TPAが設立時からJTECSを経由してご支援いただいたとき通産省の補助金が打ち切られた時でしょう。それによりTPAの運営は修正しなければならなくなりました。その少し前の2007年に大学をTPAの独自資金で作りましたので、資産が大分少なくなっていた時期と重なり、最初の数年間はみんな心配しましたけれど、今は安定しています。そして今は、大学も順調にっています。

編集部 TPAは設立当初からの既存事業もいまだに続いているものが多いですが、時代の要請にこたえた新規事業も行っていますね。また、TNIは、工業大学で工学部(自動車工学)を特色とする大学ですから、実習機材等日系企業のご協力をいただいても

設備投資にお金のかかり経営は容易ではないと思いますが、学生数が増えれば大丈夫でしょうか。

スポン 実は、大学はもう場所が足りないんです。土地とか建物とかこれからまだまだ必要です。後発大学なので授業料もまだ安く抑えているので、学生数が安定してきたらほかの大学と変わらないくらいにはしたいと思っています。

TPAも今のところ力を持っています。だから政府のプロジェクトでもなんでも受けてやってます。今の活動もやりながら更に他との差別化を図り、タイに必要な活動を常に探っています。

編集部 そうした優れた活動と並行して、TPAの特徴として『設立の精神を引き継ぐ』という努力をさまざまな機会に行っていますね。42年も経ち事業も大幅に拡大し、たくさんの職員を抱える今、そうした継承の難しさはありませんか。

スポン 世の中どこでもあるように、TPAもこれまでは内部にいろいろな問題を抱えてきました。事業が拡大した今改めて見直すところに来ています。どのようにして職員にTPAの精神とそれに根ざした仕事を理解してもらうか等、常に考えています。そういう意味もあって最近本を作りました。『元の理念に戻ろう』という内容のものです。『バック・トゥー・ベイシック』ですね。

編集部 それは誰がお書きになったものですか？



TPIセンター(パタナカン通りソイ18)

スポン 僕がインタビューされ、それを本にまとめたようです。本になることは僕は知りませんでしたが、TPAスピリットはスポンさんが一番詳しいということで、どういふものか教えてください。スピリットを説明するのは大変難しいですよ。簡単に説明できませんから、僕がTPAで歩んできた道、少し昔の話をします。その中に聞きたい答えが出てくるかもしれない。そして僕の話を書き録して最近出版したようです。それを特にTPAの職員、関係者に読んでもらおうということのようです。

編集部 そう言った意味で、TPAが創設したTNIとTPAの交流はありますか。

スポン その辺のことはいろいろ考えています。TNIの場合、TPAは親団体なのでTPA会長はTNIの副理事長に自動的になります。更にTPAの理事や専門家も一定数TPAからの推薦で入れています。更に、文部省の推薦3名とか、また内部の教師の代表2~3名とか役員になっています。ま



TNI 校舎 (パタナカン通り 1771/1)

た、大きな行事にはタイ ABK-AOTS 同窓会の会長、専務理事等にも参加してもらっています。

編集部 なるほど。新しく作られた大学ではさすがに細かい配慮がされていますね。TPA は 40 年以上経ち、役員も随分と変わったと思いますが。

スポン やはり、昔の先輩たちはだんだん遠のいてきています。だから新しい時代に新しい人が入ってくるのは当然ですね。新しい人には TPA の歴史、精神を学んでもらって、合わない人だったら自ずと離れていきます。TPA の精神をよく理解し、積極的にかかわってくれる人であれば新しい人でも古い人でも構いません。

皆さんはご存知かもしれませんが、TPA は 40 年頑張ってきた事業が評価され、2013 年に国際交流基金から『国際交流基金賞』をもらいました。最高の賞の受賞です。国際交流基金に認めていただいたのは大変光栄なことです。TPA にとって大変大きい賞です。本当に良かったです。

でも TPA はこれで安住せず、今後も成長し続けてゆきますよ。自立して行く必要がありますので、現会長のスチャリット先生（京都大学）も将来のことを考え、いろいろ新しい事業を考えて進めていますよ。

編集部 スポンさんは、日本留学を終え帰国後タイ ABK 同窓会（1968～）から始まり、TPA（1973～）・TPI（1997～）、そして TNI

（2007～）と一貫して、現在もその中心におられますね。TPA ができてから今年はまだもう 42 年になりますが、これまで日本はじめ各方面からのお力添えもあり、志を同じくするタイの仲間の人たちと、ここまで TPA を発展させ、TNI も創設し軌道に乗せてきましたが、今後の課題、抱負等あればぜひお聞かせてください。

スポン 構想力でいえば僕は穂積先生のように長い目で見えていませんが、ただ身近な大きな目標は達成したと思っています。僕の大きな三つの目標は、まず一つ目は、『タイ日両国の友好関係の構築』。緊張した時期もあり、いろんな誤解や反日運動等ありましたからね。二つ目が『日本留学生のタイ社会における評価の向上』。今は欧米の留学生にも負けません。日本留学生は各方面で実力を発揮しています。三つ目が『タイ社会への貢献』ですね。タイの産業界では TPA の名前は誰もが知っています。これまで毎年開催してきたセミナーで学んだ現場の人たちの教育は高く評価されています。

その点で僕は大変満足しています。

次の僕の夢は大学ですね。皆様のご協力もあり大学はうまく軌道に乗せることができました。将来、大学はTPAより大きくなる可能性があります。だから僕は大学の将来を見通して、土地をどうするか等、財政面からも十分検討を加えて新しいキャンパスづくりまで考えています。時期尚早かもしれませんが、そこまでやったら僕の仕事は終わりだと思っています。



TNI 校庭に建てられた穂積先生（左）とソムマーイ氏の銅像

編集部 最後に TNI の校庭につくられた穂積先生とソムマーイさんの銅像についてお伺いいたします。

そこから学ぶ機会が提供できれば意味があると思っています。

スポン 大学の中でも銅像が本当に必要かどうかとずいぶん議論されました。お金

編集部 長時間貴重なお話をありがとうございました。

もないのになんで銅

(文責：編集部)

像まで考えるのかと。

それは、その精神が、

建学の精神が大事だ

からです。大学の精

神も TPA の精神と

変わらないんです。

だからその精神を理

解してもらうため

で、そのことは、

これから大学が進む

道も迷わないように

という希望があり

ます。出来上がった銅

像を見て、この方々

は誰かということで、

Mr. Supong Chayutsahakij 略歴

学歴：

1966 東京大学工学部卒業（電気）

1968 東京大学工学部修士課程卒業（電気）

1987 タイ国立チュラロンコン大学 MBA 卒業

2004 プラナコーン・ラーチャパット大学から名誉博士授与 他

職歴：

1968-1994 帝人ポリエステル・タイランド勤務取締役次長

1994-2003 バンコク・エクスプレスウエー（株）取締役社長

2003-現 バンコク・メトロ（株）副会長 他

社会活動：

1968-現 ABK・AOTSタイ同窓会元会長、現アドバイザー

1973-現 TPA元会長、現アドバイザー

1983-現 OJSAT元会長、現アドバイザー

2006-現 泰日工業大学理事長 他

受賞：

2007 日本政府から旭日中綬章受賞

TPA関連年譜

- 1957.09 (財) アジア学生文化協会 (ASCA) 設立 (初代理事長：穂積五一)
- 1959.08 (財) 海外技術者研修協会 (AOTS) 設立 (初代理事長：穂積五一)
- 1960.06 アジア文化会館 (ABK) 竣工
- 1963.11 アジアの物故先人の慰霊祭
- 1964.11 アジア文化会館 (ABK) 同窓会発会式 (会長：穂積五一)
- 1966.06 第1回 ABK 同窓会代表者会議開催 (東京)
- 1969.09 政府派遣経済視察団 (団長佐藤喜一郎) 訪タイ → タイ国の貿易収支の悪化、急激な経済進出による経済摩擦に対処
- 1969.11 閣僚レベル日・タイ貿易合同委員会開催
- 1970.05 第1回日・タイ民間貿易合同委員会 (団長江森盛久；経団連日・タイ協力委員会貿易部会長) 開催 (バンコク)
- 1970.07 第2回 ABK 同窓会代表者会議開催 (東京)
- 1970.10 AOTS より富永佳志さんバンコク駐在員として着任
- 1970 通産省は従来の経済協力とは別の新しい経済協力を模索 → アジアに信頼関係のある人脈を持つ ABK 同窓会を軸とした経済協力を構想
- 1971.05 AOTS 穂積理事長が訪タイ；タイ同窓会はじめ、各界の意見を聴取 → 技術振興を通じてタイ国の発展に貢献することを目的とし、タイ側の自主性を尊重して運営は ABK タイ同窓会を母体にしてタイ国に設立される新法人に任せるという『日・タイ協力事業』を推進することになる
- 1972.05 経団連で (社) 日・タイ経済協力協会 (JTECS) 設立総会開催
- 1972.07 JTECS 設立認可 (初代会長佐藤喜一郎、初代理事長穂積五一) → 協会は国庫補助金 (通産省経済協力費) と民間資金 (会費) を受け、事業はタイ法人に委託し、タイ法人が企画・実施する構想。会員 34 社、経団連日・タイ協力委員会メンバーを中心に会員となる
タイ国全国学生センター等による日本商品不買運動やマスコミの反日キャンペーンの最中 → タイ法人も日本の従属機関とみられてタイ国民から浮いてしまうことを危惧
- 1972.09 タイ法人設立責任者ソムマーイ・フントラクーン氏 (タイ産業金融公社 IFCT 総裁、後タイ国立銀行副総裁及び大蔵大臣) が、来日の際、日本側関係者と会合。日本側はタイ法人の自主性を尊重する、タイ法人のための会館を建設する、タイ法人のために独自の財政的基礎を築くことに努力する、タイ法人と日本側の連絡は (社) 日・タイ経済協力協会が行うなどの合意を見た

- 1973.01 タイ国法人対日経済技術振興協会 Technological Promotion Association (Thai-Japan) ; 略称 TPA : の設立が認可 (名誉顧問ソムマーイ・フントラクーン、初代会長ワーリー・ポンウェート)
 TPA の正会員は、日本留学・研修経験者であり、正会員による総会で選ばれた理事 (任期 2 年) が理事会を構成して運営にあたり、理事の一人を委員長とする企画専門委員会 (技術経営セミナー、語学講座、技術資料翻訳出版、広報誌の 4 委員会) が事業を企画・推進する。事務局は当初 6 名。内日本語講師、会計アドバイザーとして各 1 名が AOTS、ASCA から JTECS に出向し、TPA に赴任
- 1973.01 設立認可が下りると同時にウー・チューリャン財団ビル 5 階の 650 m²を賃貸し事業に着手
- 1973.03 技術経営セミナー開始。TPA ジャーナル創刊。図書閲覧開始
- 1973.04 日本語講座開始。技術資料翻訳出版開始
- 1973.05 TPA 第 1 回総会開催
 TPA 発会式開催。穂積五一 JTECS 理事長訪タイ
- 1973.09 第 3 回 ABK 同窓会代表者会議開催 (東京)
- 1973 田口連三 JTECS 監事・AOTS 会長・経団連経済協力委員会委員長、他経済代表団一行 TPA 事務所訪問
- 1973.12 TPA 会館建設のための土地を取得 ; スクムヴィット通りソイ 29 の土地 3,432 m² → 土地代金 5,000 万円に充当するため経団連の全面的支援のもと民間資金の募金を行い 10 団体 74 社からご寄付をいただき目標を達成
- 1974.02 タイ語講座開始
- 1975.09 TPA 会館完成。事務所を移転
 → 3 階建て、床面積 1,891.5 m²の会館は、日本で建築を学んだタイの大学教授が設計。建設費は通産省所管の日本小型自動車振興会から補助を受け実施
- 1977.03 第 4 回 ABK 同窓会代表者会議開催 (東京)
- 1980.11 第 5 回 ABK 同窓会代表者会議開催 (東京)
- 1985.07 TPA 別館開館 (4 階建 (1 階は駐車場)、1,734 m²) ; 日本小型自動車振興会から補助金を得て実施
- 1998.01 TPA 付属技術研修センター (T P I) 開館
- 2007.06 TNI 開学
- 2007.08 TNI 開学記念式典開催

(2015/11 編集部作成 ; JTECS15 年史他参照)

異国の友達を作って視野を広げよう

羅 淑慈 (Ms. LO Shuk Chi Elsa) ~香港

文化外国語専門学校 日本語通訳ビジネス科

日本語で理解したいから

私が日本語に関心を持ったのは、アニメや漫画、ゲームなどの日本文化に興味を持ったからです。それら全てを日本語で聞ける、読めるようになりたいと思ったんですね。

もちろんそれらは広東語に翻訳されているのですが、時々文化の違いなどから、異なった意味に訳されている時もあります。だから私は直接日本語で何が話されているのか、書かれているのかを理解したいと思ったんです。そして大学生だった2009年頃に日本語の勉強を始めました。

日本に留学しようと決めたのは大学を卒業し、就職して3年経った頃です。当時も香

港で日本語を学んでいましたが、もっと日本語力を伸ばしたいという思いは強く、行くのなら今しかないと思ったんです。



ただ、母は原発事故の影響も含めて日本行きには反対だったようです。

「今から日本にまで行って

日本語を勉強することに意味はあるの？ せっかく慣れてきた仕事を辞めてまで留学する必要が本当にあるの？」と尋ねられました。私も確かにそうだよねと思いました。でも自分の周りの人はみな視野や世界観が狭い。彼らと接していて、自分は外国に出てもっと広い視野を持ちたいと思ったんですね。

私が来日前に一番不安だったのは自分の日本語力でした。この日本語力で本当に日本で生活できるのか、それはとても不安でした。どうやって店員さんとコミュニケーションをとればいいのか、銀行口座を開設すればいいのか、食べたいものが食べられるのか・・・。

ところが実際に東京で暮らし始めてみると、そんな不安は吹き飛びました。日本のお



▲タイ人の大親友(右)を香港に迎えて

▶日本語学校の卒業式で先生方と



もてなし精神は素晴らしいですし、食べ物は何でも美味しい。私は香港では生ものは食べられなかったのですが、東京に来てお寿司とかお刺身がこんなに美味しいものなんだということを知りました。香港でも日本料理は人気がありますが、日本で食べるほうがずっと美味しい。銀行口座の開設は予想以上に面倒でしたが(笑)、今のところ日本に来て残念に思ったことはありません。とにかく毎日が楽しいです。

短所を知って長所を学ぶ

では何が一番楽しいかと聞かれたらそれは学校です。学校ではいろいろな国の人とコミュニケーションができてその人の国の文化や言葉を知ることが出来る。みんなから自

分の国の日常生活を日本語で聴けることがとても嬉しくて楽しいんです。

だから留学生のみなさんには、たくさん他の国の友達を作って、彼らの生活や考え方を学んで、視野を広げて欲しいですね。それが日本留学生活の楽しさに繋がると思います。

例えば炊飯器はどこの国でも使う普通のものだと私は思っていたのですが、学校のフランス人は一度も使ったことがないそうで、私はびっくりしました。フランスでは鍋にコメと水を入れて鍋料理のようにご飯を作るそうです。また、韓国人の朝食は必ずご飯で、パンはめったに食べない。そんなことも新鮮な驚きでした。

そんな学校生活の中で、一番思い出に残っているのは日

本語学校(ABK学館)時代の修学旅行です。ちょうどその日は私の誕生日と重なっていて、クラスメートがみんな私のためにケーキを準備してくれたんです。日本で初めての修学旅行でそんな体験ができて、本当に感動しました。香港の修学旅行は日帰りですから、宿に泊まって遅くまでクラスのみんでお喋りをして過ごすという体験は人生で初めて。本当に心が温まる思い出で、日本に来て良かったなあと思った一夜でした。

だから少しでも日本に来たいと思っているのなら、そんなに深く考えず、まずここに来てみることでいいですね。そして体験をしてみる。私も最初は不安でしたが、いくら考えても答えは出ない、来てみないとわからないことはたくさんあります。そしてせっか



▲専門学校の研修旅行で

▼各国の仲間たちと美味しい一時



く留学したのなら色々な人と積極的にコミュニケーションして、自分の長所、短所を知る。誰でも短所はありますが、相手の長所を学ぶことで世界はどんどん広くなると思います。

実は私は今まで社会のこと、政治や経済のことに興心がありませんでした。でも日本に来て、それは自分の一番いけないところだと思いました。

他国の友達からその国の社会問題などを教えてもらって、「そういうニュースがあるんだ、知らなかった」、ということがあまりにも多くて、自分をもっと知らないといけないなと思ったんです。

香港の民主化運動に関するニュースも、私はもともと興味がありませんでした。で

も、友達からこのことについて聞かれたり、彼らの感想を聞くことで、母国のことについてももっと考え意見を言えるようにならなければならないと思いました。

そしてそれがきっかけで私はこのニュースを色々な媒体で見聞きました。そこで面白いと思ったのは伝え方が違うということです。運動を支援しているように報じているニュースもあれば、迷惑行為のように報じているニュースもあります。同じことを伝えているはずなのに、微妙に観点が違い、読者や視聴者に様々な印象を植え付ける。それは自分にとって興味深い発見であるとともに、報道を鵜呑みにしてはいけない、自分で考え、判断することの大切さを知る機会となりました。

今、私は日英の通訳・翻訳者になるために学んでいますが、通訳するにはもっと英語と日本語の能力を伸ばさないといけない、そして経験を積まなければならないと日々感じています。聞いた話をすぐに別の言語にするというのはかなりのトレーニングが必要ですが、私は小さな仕事で少しずつ経験を積んで、将来は大きな国際会議の場などでも活躍できるようになりたいと思っています。

そういえば11月11日はポッキー（グリコのお菓子）の日なんですけど、日本ではあまり流行っていませんね。ところが、韓国ではとても流行っているそうです。そんな小さな文化の違いを知ることも私にとっては留学生活の楽しみなんです（笑）。

だから日本に留学しました！

ムハَمَّد アリ アリさん (Mr.Muhammed Ali Ari) イゼット キョミクさん (Mr.Izzet Kiymik)

～トルコ出身 ABK日本語コース在籍 (2014年10月生)



—— 日本留学のきっかけを教えてください。

アリ 私は大学進学のために通っていた塾で日本トルコ育英会 (NPO 法人) の奨学生募集の案内を見たことがきっかけです。それを見てすぐに応募しようと決めました。もともと情報工学に興味があったので、その分野が発展している日本で学んでみたいと思ったんです。実は一度トルコの大学の医学部に入ったのですが、この奨学生試験に合格したので退学して日本に行くことにしたんです。両親

はそのまま医学の道に行くよう私を説得しましたが、私にとって日本留学はとてもいい機会だと思い、自分の意思を優先させました。

イゼット 私も同じ奨学金の募集案内を塾で見てこれはチャンスかなと思いました。

アリ イゼットさんも一度トルコの大学に入りましたよね。学部は何でしたか？

イゼット 私は法学部でしたからトルコに残っていたら検察官などを目指していたと思います。日本では国際関係法のような学問を学ぶつもりです。日本はアメリカや中国、ロ



イゼットさん

シアという強い国に囲まれているにも関わらず、戦後の1945年から急激な経済発展を成し遂げました。どうしてそれができたのか、私はそれを勉強してトルコの発展に貢献したいと思っています。

——トルコの若者が初めて接する日本はどのようなものですか。

イゼット アニメですね。私は5歳の時から、ポケモンなどを見て日本に興味を持っていました。トルコでは本当に日本のアニメは有名なんですよ。

アリ 日本のアニメはテレビではトルコ語で放送されていますが、ネットでは日本語音声にトルコ語の字幕で見れるものもあって、それを見て日本語を学ぶトルコ人大学生はけっこういるんです。

——日本は地震が多い国ですが、不安はありませんでしたか。

アリ 一番不安だったのは日本語の文字です

ね。トルコは全部アルファベットなんです。でも日本は漢字やひらがな、カタカナと見慣れない文字がたくさんあって、それらを全て覚えることができるのか、ちょっと不安でした。でも今はだいたい大丈夫です。地震について、親は今もちょっと不安のようです。トルコも地震はありますが、日本はずっと多いですから。ただ私は実際日本で地震を経験しましたが心配していません。日本人が造ったビルは本当に丈夫だと思っていますから、ちょっと揺れるくらいは逆に楽しいと感じています（笑）。

イゼット 私も自分では心配していないのですが、驚いたのは日本で地震が起きるとすぐトルコの母親から電話がくるということでした。突然電話が鳴って「おまえ大丈夫か？」って。「何で？」と聞いたら、「日本で地震が起きたけどおまえは知らないのか」って。私は「地震？東京で？」って、本当にびっくりしました。私より早く東京で地震が起きたことを知っているんです（笑）。いつもインターネットで日本のニュースをチェックしているみたいです。

——東京に来て驚いたことやカルチャーショックを感じたことはありましたか。

アリ ほとんどの人が電車で通勤通学していることですね。トルコではバスが普及していますから東京で電車や地下鉄がこれほど発展していることには本当に驚きました。それにそれらが時刻表通りに来ることにも驚きました。それから物価が高いこと。実はカメラやスマホ、パソコンなどのデジタル家電は、日本はすごく安いと思っていたのですが、比べるとトルコとだいたい同じくらいの価格で、そこはちょっと残念でした（笑）。

イゼット 私のほうはちょっと冗談ばいので

すが…トルコでは日本といえばロボットテクノロジーとよく言われています。だから飛行機が日本に着いた時、もしかすると私たちを迎えてくれるのはロボットかもしれないと思っていました。でも空港に着いて、実際には生身の日本人が迎えてくれたのでホッとしました(笑)。

アリ それから、日本人は電車に乗るとどうしてそんなに優しくなくなるのかなと思います。乗る時も降りる時もみんな強引に押して押して、まるで人を邪魔者扱いするかのようになり降りする。トルコでは車中が込んでいてももう少しお互いが気づかいながら乗り降りしますね。日本人はそのこと以外では本当に優しいと思います。道でわからない住所を聞くと、みなさん熱心に教えてくれます。トルコ人は日本人ほど親切には教えてくれないでしょうね。

イゼット これはカルチャーショックかどうかわかりませんが、赤ちゃんの数より犬の数の人が多いことに驚きました。どうして赤ちゃんが少なく犬がこんなに多いのかと。若い夫婦も赤ちゃんじゃなくて犬を連れていて、どうしてかなと思議に思います。

—— では日本に住んで見てわかったトルコの良いところは何でしょう。

2人 トルコの食べ物です!

—— お二人ともムスリムですが、食べ物で困ることはありませんか。

アリ パッケージに「ハラール (HALAL)」というマークが付いている食品であれば私たちは食べることが出来ます。日本ではハラール食品がだんだん増えていて、そうした製品を多く扱っているスーパーもありますし、トルコ人経営の会社でトルコ製の食べ物をネット販売しているところもありますから、不便



アリさん

は感じないですね。ハラールは健康にもいいので、日本の方でも宗教に関係なくハラール食品を買う人もいます。

—— **日本食はどうですか。**

アリ ラーメンとか寿司とか、トルコでは一度も食べたことがありませんでしたが、今は大好きです。回転寿司にみんなで行くこともあります。

イゼット 本当に美味しいラーメン屋さんがたくさんあります。安心して食べることができるので、ムスリム中華料理店やムスリム日本料理店などに行くこともあります。

—— では不便に感じることは何でしょう。

イゼット ゴミの捨て方です。今は慣れてきたので、それほど感じなくなってきましたが最初は難しかったですね。また、トルコでは道のどこにでもゴミ箱が置いてあります。日本ではコンビニの前にしかないの、それはちょっと不便だと思います。

アリ 分別はわかるのですが、これは何曜日
にしか捨てられないという曜日指定がとても
大変です。燃えるゴミがたくさん溜まってし
まうと嫌な臭いがすることがあります。トル
コでは何でもいつでも捨てられますからそこ
はトルコのほうが便利です。

イゼット でも基本的に東京での生活は便利
で楽しいと思います。例えば浅草に行く
と活気があって、あちこちにたくさん外国
人がいてお互いに話したり、日本人のおば
あさんと話したり。学校のそばの巣鴨もお
年寄りがたくさんいますよね。巣鴨駅の
前で待ち合わせをしていると、どこかの
おばあさんが来て「どこから来たの？」と
話しかけられたことが何回もあります。ある
人は私をイタリア人かと思ったと言ってい
ました(笑)。

アリ それにディズニーランドやディズ
ニーシー、富士急ハイランドなどのアミュー
ズメントパークが多いというのも魅力的で
す。それらは私にとってとても幸せな場所
です(笑)。

—— **ABK日本語コースの印象はどうで
しょう。**

アリ 建物はちょっと古いですが、先生たち
は本当に経験があって優しいと思います。特
に私たちの担任の先生は何か手伝ってほ
しいことがあるといつも一生懸命にやってく
れますから、本当にありがたく思っています。

イゼット それに加えて、良かったのはお祈
りの場所を作ってくれたことです。以前は空
いている教室を探してお祈りしていましたが、
今は決まったところでお祈りできるので、
とてもありがたく思っています。

アリ わざわざそのスペースを確保してく
れたことに、ABKが宗教に対して敬意を払っ

てくれている気持ちを感じて嬉しいです。

—— **将来の夢を教えてください。**

アリ 大学院までは日本で学び、その後はア
メリカに行きたいと思っています。そして
Googleやピクサーといった世界的な会社に入
って、トルコについての様々な作品を作り、
トルコの文化や歴史、トルコ人の良い面につ
いて世界中の人に知ってもらいたいと思っ
ています。トルコのために貢献したいので、そ
ういう夢を持っています。

イゼット 私は日本の大学を卒業した後は、
アメリカのスタンフォード大学に入りたいと
いう希望を持っています。そこで欧米から見
た日本を研究し、将来はトルコの外交官試験
を受けたいと思っています。欧米人にとって
の日本について、いろいろな知識を身に付け
てから、外交官として日本に赴任したいとい
うのが将来の夢です。

アリ イゼットさんは将来トルコの大統領に
なるかもしれません(笑)。

—— **今、日本留学をどう思いますか。**

アリ 私は強くお勧めします。こんなに安全
な国は世界中探しても珍しいと思いますか
ら、留学生にとってぴったりだと思います。
例えば夜ドアを開けたままにしておいても大
丈夫なほど安全なところだと感じています。

イゼット 私もお勧めします。ただ私たちは
トルコでは全く日本語を勉強したことはあり
ませんでした。でもこれから日本に来るつも
りの人は少しだけでも日本語を勉強して来た
ほうが良いと思います。ぜひ日本語を勉強し
てから来てください、とアドバイスしたいで
すね。

—— **お二人とも希望の大学に合格できる
ようがんばってください。ありがとうございました。**

バンコクの泰日工業大学で活躍するスタッフ&先生によるリレーエッセイ

泰日工業大学 (TNI) 奮闘記

⑭ 中華系学生の勤勉さ

池田 隆

東南アジアの国々には、中華系の人々が広範囲に広がって生活している。タイもその例外ではなく、タイへの移住は数百年以上前から続いている。一説には、タイの人口の3～4割、また、極端な説では、ほとんどのタイ人にその血が流れているとも言われている。

バンコクは中華系の比率が高く、中華街・ヤワラート通り周辺は、中国の雰囲気色が濃い。中国寺院、中華料理店、中国の食材店、中国茶店、漢方薬店等が軒を連ね、中国語で話しあう老人たちの姿もときおり見受けられる。

TNIの学生も地方の大学に比べると、かな

り中華系の学生が多い。その多くが、祖父母の時代にタイへ渡ってきたという。傾向としては、経営学部が多く、工学部には少ない。中華系は昔から、流通業、商業に従事してきた。中華系のネットワークを駆使し、商品を選び、販売してきた。肉体労働者としてタイに渡り、苦勞して資本を貯め、ビジネスを始めた中華系もいる。いずれにせよ、学生の家では何らかの商売をしていることが多く、子供の時からそれを肌で感じている。このことが、経営学部中華系が多い理由だ。

また、かつては外国人として一時期定住して、中国に帰る可能性もあったため、工業のように、大規模な設備投資を要する産業には



中華街の門



中華街の様子、ヤワラート通り



泰日工業大学の制服を着たティーラポーンさん

参入しにくかった。その名残りとして、中華系は、設備投資よりも、人間、即ち、教育に投資する傾向が強い。簡単に言うと、教育熱心だ。筆者の感覚から言っても、中華系の学生は勉強に対する意欲があり、頑張り屋さんが多いという印象が強い。

今回紹介する学生、ティーラポーン・ロツジャナスイリボンさん、国際経営学科4年生も、その一人だ。

筆者は、学期中の授業時間外や夏休み（3月～5月）に、会話や文法を勉強したいという学生を集めて、同好会的なことを行っている。夏休みのある日、いつものように教室に行くと、「先生、明日は会話の練習を休んでもよろしいでしょうか。」と、ティーラポーンさんが言った。彼女を見ると、いつもの制服ではなかった。白いブラウスは同じだが、校章

とボタンが違っていた。ラムカムヘン大学の校章だった。

そう、彼女は、泰日工業大学と、ラムカムヘン大学と、両方の学生だったのだ。彼女は英語学科で勉強している。翌日の会話練習の時間にラムカムヘン大学でテストがあるため、筆者に許可を求めたのだ。ラムカムヘン大学は、オープン大学で、普段は自宅で勉強し、定期テストの時のみ、大学で受けることになっている。ちなみに、ラムカムヘンとは、タイの昔のスコータイ王国第3代王で、13世紀の人物。名君として知られ、その碑文が世界遺産になっている。

彼女とラムカムヘン大学との関係は古い。中学3年生の時、アメリカの弁護士のドラマを見て、弁護士に興味を持った。弁護士の仕事の本を読んだり、裁判記録の解説書を読んだり、かなり熱中した。思いは募り、早く法律の勉強がしたくてしかたがなかったが、大学生になるには何年も待たなければならなかった。

しかし、その翌年、16歳で彼女は法学部の大学生になった。実は、ラムカムヘン大学



泰日工業大学の校章とラムカムヘン大学の校章

は16歳から入学できるのだ。喜び勇んで、勉強に取り組む彼女。しかし、難解な法律用語は、高校1年生の彼女に太刀打ちできる相手ではなかった。結果は全科目で落第。屈辱的な結果に終わった。

しかし、転んでもただでは起きぬというのが、中華系の本領発揮といったところ。弁護士のドラマから、英語そのものに興味をシフトさせ、アメリカに1年留学。それがきっかけで、外国文化に興味を広げ、同じアジアの日本に興味を持つようになった。そして、3年生の時、立命館アジア太平洋大学を受験。見事合格。さらに授業料6割免除も得られた。しかし、生活費を考えると、経済的負担が小さくなく、留学は不可能だった。そこで、日本との関係が強い泰日工業大学で勉強することにした。同時に、ラムカムヘン大学での勉強も再開した。

今年の前期は筆者の都合で朝8時から文法のレッスンをしていたが、毎回遅刻せずに参加していた。彼女の家はバンコクの北の方にあり、通学に時間がかかるのにも関わらず、きちんと来ていた。静かで、のんびりした雰囲気彼女だが、見た目に反してなかなかの頑張り屋さんだ。また、礼儀正しい性格で、大学内で会うと、丁寧にお辞儀をする。とて



ラムカムヘン大学の前で

もよい学生だ。後期はどんな授業にしようかと、あれこれ考えてしまう。

しかし、もう、彼女を見かけることもなくなってしまった。まじめで成績の良い彼女は、全ての科目を修了し、後期は大学に来る必要がなくなってしまったためだ。一緒に練習に来ていた彼女の友達も同様に修了した。なんだか急に寂しくなってしまった。しかし、教師としては、大いに喜ぶべきことなのかもしれない。

一足先に「卒業した」彼女。仕事を始めるにしろ、他のスキルアップを目指すにせよ、他の学生より有利であることに間違いはない。1年次からきちんと計画を立てて確実にこなしてきたからこそだ。

これからも、その持ち前の勤勉さで、困難な問題を乗り越えていくことだろう。

池田隆 (いけだたかし)

泰日工業大学 (TNI) 教養学部日本語講師。2003年青年海外協力隊員として、タイ国ウボンラチャタニ大学に赴任。その後、タイ南部タクシン大学を経て、現職。

Visiting Tokyo after 50 years

It is a great pleasure to visit Tokyo after 50 years. What a wonderful experience it is. Indeed, it is a new feeling and understanding of Tokyo as if it is re-discovered. The more we look, the more we like.

Although Tokyo has changed a lot, the people have not changed at all. They are as kind, friendly and courteous as they were half a century ago. Tokyo has changed dramatically in its structure, such as proliferation of commuting train lines and high-rise buildings which grew like mushrooms. There is Sanju Nanakai no Otoko (a movie made based on the Kasumi Gaseki building –the tallest at that time) everywhere today. The proliferation of commuting train lines has done a wonderful job of greatly minimizing the load on the roads and cost of traveling. These commuting trains are almost completely eliminating the traffic jams we see in many cities in North America such as Toronto, New York, Chicago, Atlanta and Los Angeles, just to name a few. In fact during our shuttle bus rides between Narita airport and New Otani Hotel in Akasaka Mitsuke we hardly faced any traffic.

During our short stay, we also had difficulty remembering all the names of the train lines and stations we were using. The most noticeable change we found was the creation of “Two Tokyo”, one over the ground and another underground. Today, the “underground Tokyo” has everything you need for day-to-day living such as excellent transportation, shopping centers (mostly food courts) and other necessities of life. The “Overground Tokyo” provides well-paved roads and side-walks made of granites, ceramics and Belgium blocks and lanes for bicycles. We must mention that new Tokyo also created thousands of “skyscrapers” which dwarf the Kasumi Gaseki building. We also found ladies riding bicycles with two children. Even elderly ladies in their seventies riding bicycles with ease and comfort.

During our stay, we took our children with their spouses and our grand children to Mita Campus of Keio University where I learned Japanese language. This visit also made me very emotional. We then visited the Imperial Palace, Meiji Shrine and some other places of importance. Needless to say, we concluded our visit spending some time in the magnificent shopping centers at Shinjuku and other locations.

If you are a foreigner (hen na Gaijin) like me visiting Tokyo and want something for free, you would get it in abundance without fail. That is called “Shinsetsu Japanese”.

Lutfar Rahman came to Tokyo as a Mombusho Scholar in 1965.

After studying the Japanese Language in Mita Campus, he obtained the PhD.

Degree from the Faculty of Engineering, Keio University specializing in Pulp and Paper under the guidance of Professor Mitsuo Fujii in 1970. He also had personal advices from Professor Noriyuki Sakikawa of Tokyo Kogio University.

He worked as Senior Scientist in three large Corporations in Canada and USA and published 27 papers in many scientific journals in Japan, Canada, USA and Europe. He is now visiting Japan with his wife, children and grand children. He has retired and presently living in Michigan, USA.

50年ぶりの東京訪問

50年ぶりに東京を訪問できたことは大きな喜びです。なんと素晴らしいことだったでしょう。あたかも再発見したように東京に対する新たな感覚と理解でした。見れば見るだけ好きになりました。

東京は多くが変わったにもかかわらず人々は全く変わっていません。彼らは半世紀前のように親切で、フレンドリーで、礼儀正しいかったです。また、通勤路線の拡張やマッシュルームのように伸びた高層ビルに見られるように、東京はその構造が劇的に変化しています。50年前日本で一番高い霞が関ビルを作った時に製作された映画に『37階の男』というのがありますが、今日はいたるところにそうしたビルが建っています。通勤路線の拡充は、道路と交通コストの負荷を最小限に抑える素晴らしい仕事です。これらの通勤電車は北米のトロント、ニューヨーク、シカゴ、アトランタ、ロスアンゼルス等多くの都市で見られるような交通渋滞を解消しています。実際に、成田から赤坂見附のニュー・オータニ・ホテルまで乗車したシャトルバスは、ほとんど交通渋滞には合いませんでした。

短期の滞在では電車の路線名も駅名も覚えるのは困難でした。目にした中で、もっとも顕著な変化は「二つの東京」ができて上がっていたことです。地上に一つともう一つ地下に。今日、『地下の東京』には素晴らしい交通網、ショッピング・センター、特にフード・コート、その他生活必需品のような日々の生活に必要なものは全てそろっています。『地上の東京』は、よく舗装された道路と花崗岩・タイル・ベルギーブロック等で作られた歩道、そして、自転車レーンが整備されてます。新しい東京には嘗ての霞が関ビルが小さく見えるたくさんの高層ビルが林立していることにも言及しておく必要があります。二人の子供を自転車に乗せた女性達も見かけました。また、70歳代の年配の女性たちさえ気軽に楽そうに自転車に乗っていました。

日本滞在中に、私が日本語を学んだ慶應義塾大学の三田キャンパスに妻と子どもと孫を連れて訪問しました。この訪問はとても感激しました。その他、皇居、明治神宮他有名な場所を訪ねました。言うまでもなく新宿他の巨大なショッピング街も訪れました。

もしあなたが東京を訪れる私のような『変な外人』で、自由に何かしたいなら、あなたは必ずそれを豊富に手に入れることができると伝えたい。それは『日本人の親切』に出会えるからです。

Laftar Rahman : 1965年文部省奨学生として来日。慶應義塾大学三田キャンパスで日本語を学んだ後、慶應義塾大学・工学部でパルプ・製紙を専攻し、1970年にふじいみつお(藤井光雄)教授の指導の下、博士号取得。同時に、東京工業大学のさきかわのりゆき(崎川範行)教授のアドヴァイスもいただいた。その後、カナダ、アメリカの3つの大きな団体で上級研究員として働き、また、日本、カナダ、アメリカ、ヨーロッパの多くの科学誌に27の論文を掲載した。現在は、退職し、アメリカミシガン州在住。



奨学金情報

※ 奨学金情報は Japan Study Support のホームページよりご覧いただけます (<http://www.jpss.jp/ja/>)

公益財団法人 岩谷直治記念財団 岩谷国際留学生奨学助成

●対象：(1) 日本以外の国籍を有し、東アジア・東南アジアの国・地域（中国、韓国、モンゴル、台湾、カンボジア、インドネシア、ラオス、マレーシア、ミャンマー、フィリピン、シンガポール、タイ、ベトナム）から修学または研究のために来日している私費留学生 (2) 大学院の修士課程および博士課程の在籍者、または入学決定者並びに博士課程3年終了者で博士学位取得のための継続在籍者

(3) 自然科学系および関連する学際分野 (① 工学、理学および農学の全般 ② 医学部の一部 (分子病態学、公衆衛生学のみ))

③薬学部の一部 (分子微生物学のみ) を専攻している者 (4) 平成28年4月1日時点の年齢が修士課程は満30歳未満、博士課程は満35歳未満の者 (5) 平成28年4月以降、他からの奨学金を受けない者

(6) 年5回開催する奨学生例会 (うち1回は2泊3日の研修旅行) に参加できる者 (7) 奨学金支給終了後も当財団と通信等を継続す

る意志のある者 (8) 国際交流と親善に貢献する者

(9) 日本語で日常の会話ができる者

●給付金額：月額15万円 (別途、学会発表のための旅費などを補助する)

●支給期間：1年

●採用人数：15名

●応募方法：実施団体に申し込む

●応募期間：12月1日(火)～12月20日(日) (消印有効)

●実施団体：公益財団法人 岩谷直治記念財団 〒104-0028 東京都中央区八重洲2-4-11 八重洲h+ビル3階

Tel 03-6225-2400

Fax 03-3231-7070

URL <http://www.iwatani-foundation.or.jp/>

e-mail information@iwatani-foundation.or.jp

公益財団法人ヨネックススポーツ振興財団 奨学金

●**対象**：(1) 高等学校、大学または大学院に在学し、体育学等を専攻する学生（海外からの留学生を含む）、またはスポーツを積極的に行う学生で、スポーツを通じて明るく豊かで活力に満ちた社会の実現に寄与し、他の範となる方。(2) 給与期間（平成28年4月1日～翌年3月31日）において、次の該当項目を満たしていること。

- ①専攻するスポーツ種目において、自他ともに認める力量を有していること。②青少年スポーツ振興のための指導者を目指していること。③申請時に満30歳未満であること。

●**支給金額**：高校生…月額4万円以内
大学生（大学院生を含む）月額5万円以内

●**支給期間**：1年間

●**応募方法**：実施団体に申し込む。ホームページより、願書等をダウンロード

●**応募締切**：12月31日（当日消印有効）

●**実施団体**：公益財団法人ヨネックススポーツ振興財団

〒113-8543 東京都文京区湯島 3-23-13 ヨネックス株式会社内

Tel 03-3839-7195

Fax 03-3839-7196

E-mail zaidan@yonex.co.jp

URL <http://www.yonexsports-f.or.jp/shougakukin.html>

株式会社 共立メンテナンス 奨学基金

●**対象**：(日本国内) アジア諸国の国籍を持つ私費留学生で日本の大学・短期大学、専門学校、日本語学校に在籍していること。(日本国外) ベトナム、ミャンマー、カンボジア、インドネシアに在住で日本に留学予定の学生。

※当財団選考基準では外務省が規定しているアジアの国を『アジア諸国』としており、該当国は以下の21カ国+2地域です。

大韓民国、中華人民共和国、台湾、香港、モンゴル、ベトナム、ラオス、カンボジア、タイ、ミャンマー、マレーシア、シンガポール、インドネシア、フィリピン、インド、スリランカ、パキスタン、バングラデシュ、ネパール、ブータン、東ティモール、ブルネイ、モルディブ

●**支給金額**：月額6万円

●**支給期間**：1年間

●**採用人数**：35名

●**応募方法**：財団奨学金対象校である学校を通して応募する（学校推薦）

●**応募締切**：2016年1月31日（日）（当日消印有効）

●**実施団体**：一般財団法人 共立国際交流奨学財団 〒101-0021 東京都千代田区外神田

2-18-8（株式会社 共立メンテナンス内）

Tel 03-5295-0205

Fax 03-5295-0206

URL <http://www.kif-org.com/>

いっばんざいだんほうじん きょうりつこくさいこうりゅうしやうがくざいだん しやうがくきん
■ 一般財団法人 共立国際交流奨学財団 奨学金

●**対象**：(1) アジア諸国の国籍を持つ私費留學生で日本の大学院、大学・短期大学、専門学校に在籍していること。

※ 当財団選考基準では外務省が規定しているアジアの国を『アジア諸国』としており、該当国は以下の 21 カ国 +2 地域です。

大韓民国、中華人民共和国、台湾、香港、モンゴル、ベトナム、ラオス、カンボジア、タイ、ミャンマー、マレーシア、シンガポール、インドネシア、フィリピン、インド、スリランカ、パキスタン、バングラデシュ、ネパール、ブータン、東ティモール、ブルネイ、モルディブ

●**支給金額**：月額 10 万円

●**支給期間**：2 年間

●**採用人数**：15 名

●**応募方法**：財団奨学金対象校である学校を通して応募する (学校推薦)

●**応募締切**：2016 年 1 月 31 日 (日) (消印有効)

●**実施団体**：一般財団法人 共立国際交流奨学財団 〒101-0021 東京都千代田区外神田 2-18-8 (株式会社 共立メンテナンス内)

Tel 03-5295-0205 Fax 03-5295-0206 URL <http://www.kif-org.com/>

MEMBERS

〈会費とご寄附の報告〉

2015 年 8 月

特別会員

- (3口) (一財) 海外産業人材育成協会 足立区
- (1口) (株) シーボン 港区 立命館アジア太平洋大学 別府市

賛助会員

- 雅留宮 久磨 / 澄子 千葉県
- 服部 泰子 豊田市

正会員

- (1口) 大友 恭子 横浜市

- 近藤 清子 秩父市
- 酒井 杏郎 渋谷区
- 稲垣 史 足立区
- 藤原 一枝 武蔵野市
- 宮原 彬 富士見市
- 豊島 由久 所沢市
- 堀内 智代子 国分寺市
- 代田 泰彦 / ますよ 所沢市
- 竹田 繁 南陽市
- 岩井 秀生 入間市

ご寄附

- 深澤 のぞみ 金沢市

2015 年 9 月

特別会員

- (5口) (株) スリーエーネットワーク 千代田区

賛助会員

- 亜細亜大学 武蔵野市

正会員

- (1口) 広江 重徳 浅口郡
- 増井 潤一郎 中野区
- 平田 熙 松戸市
- 寺尾 方孝 / 三枝子 国分寺市
- 稲澤 宏一 新宿区
- 鵜田 純一 / 由美 千葉市

ご寄附

- 鵜田 純一 / 由美 千葉市

皆様の暖かい御支援に感謝申し上げます

ご入会とご寄付のお願い

当協会は、政府の補助金を受けていない純民間運営の公益法人ですので、財源に限りがあり、皆様方からお送りいただく会費、寄付金は、本協会の活動を支える貴重な財源となっています。何卒ご理解、ご協力をお願い致します。

協会のあらまし

名 称：公益財団法人アジア学生文化協会
ASIAN STUDENTS CULTURAL ASSOCIATION
(ASCA)

所在地：東京都文京区本駒込2丁目12番地13号

代表者：理事長 小木曾 友

設 立：1957年(昭和32年)9月18日
故穂積五一氏創設

目 的：日本とアジア諸国の青年学生が共同生活を通じて、人間的和合と学術、文化および経済的交流をはかることにより、アジアの親善と世界の平和に貢献することを目的とする。

◇主な事業◇

- (1) 留学生宿舍の運営
- (2) 留学生日本語コースの運営(進学希望者向けの日本語を中心とする教育)
- (3) 留学生に対する情報提供支援
- (4) アジア語学セミナー
- (5) 帰国留学生のアジア文化会館同窓会、(社)日・タイ経済協力協会、ABK留学生友の会との連携・協力

◇会費(年額)◇

正会員 1口 1万円
賛助会員 1口 5万円
特別会員 1口 10万円

会員には広報誌「アジアの友」が無料配布されます。また、広報誌購入だけを希望される方には、購読料年間3千円(十税)でお送りしています。

当財団に対する寄附金は、所得税、一部自治体の個人住民税、相続税、及び法人税の税制上の優遇措置があります。

2015年度より購読料に別途消費税をご負担いただくことになりました。何卒ご了承下さい。

おかげさまで、当財団は2014年4月1日に公益財団法人に移行しました。これまでご支援いただきました皆様には大変ご迷惑をおかけしておりましたが、これにより会費並びに寄附金は税制上の優遇措置の対象となります。今後とも、皆様のご支援の下、これまでと同様留学生宿舍の運営、留学生への情報提供、同窓会活動等の活動を通じ、アジアの青年の育成と友好親善のために微力を尽くす所存です。引き続き皆様のご支援を賜りたくよろしくお願い申し上げます。

後記

10月24日(土)、恒例の2015年の秋祭りをABKで開催しました。PRポスターが遅れたため広報が遅れてましたが、それにもかかわらず総勢500名近くになり、学生で作る各国料理を近隣の住人の方々初め、多くの人が楽しむことができました。来年の課題は、PRの開始時期を早めること。

11月7日(土)・8日(日)、久々のABK大学生の研修旅行を実施しました。東芝国際交流財団から助成金をいただき実現した一泊旅行です。一日目はリサイクル工場見学、富弘美術館訪問、尾尾銅山見学、そして奥日光の湯元に宿泊。夜はディスカッション、1次会、2次会と普段できない交流を楽しみました。また、夕方から降りだした雨は翌日もやまず、雨にぬれた美しい紅葉を目にしながら華厳の滝と世界遺産・日光東照宮見学をしてきました。詳細は次号でご報告いたします。

小木曾友当財団理事長が、泰日工業大学(TNI)から11月15日に開催された大学の2014年度卒業式に招待され、感謝状を授与されました。詳細は次号でご報告いたします。(F)

(お詫びと訂正)

本誌516号(2015年8-9月号)に次の誤りがありました。お詫びして訂正をいたします。
表紙、P1、P2(誤) プロラム→(正) プログラム
P2(誤) 当協会専務理事布施→(正) 当協会常務理事布施

アジアの友 2015年10-11月号

2015年11月20日発行(通刊第517号)

年間購読(送料共)3,000円+税 1部 500円+税

発行人 小木曾友
編集 アジアの友編集部
発行所 公益財団法人 アジア学生文化協会
東京都文京区本駒込2-12-13 (☎113-8642)
電話番号：03-3946-4121 ファクシミリ：03-3946-7599
振替口座：00150-0-56754 E-mail：tomo@abk.or.jp
ホームページ：(http://www.abk.or.jp/)

published by ASIAN STUDENTS CULTURAL ASSOCIATION
(ASIA BUNKA KAIKAN)

2-12-13, Honkomagome, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-8642, JAPAN
☎+81-3-3946-4121 ☎+81-3-3946-7599
Email: tomo@abk.or.jp
Home Page: http://www.abk.or.jp/

会員並びにご購読のお申込みはメール・電話または巻末の振替用紙にてお願いいたします。

